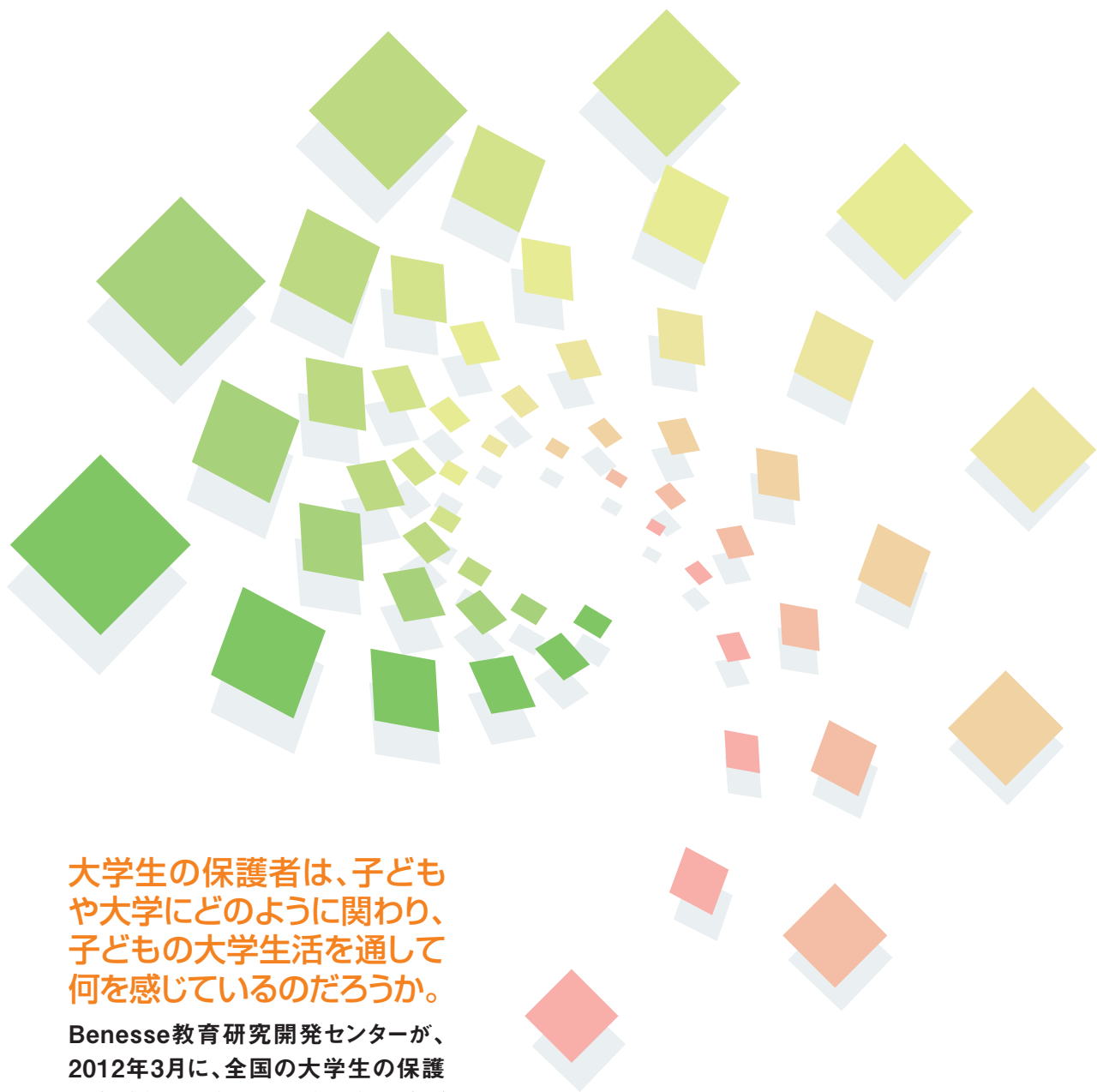


大学生の 保護者に関する調査



大学生の保護者は、子どもや大学にどのように関わり、子どもの大学生活を通して何を感じているのだろうか。

Benesse教育研究開発センターが、2012年3月に、全国の大学生の保護者を対象に実施した調査の結果をご紹介します。

調査概要

▶調査テーマ◀

- これまで全国規模で量的に把握されてこなかった、大学生の保護者からみた大学教育に対するニーズや要望、大学への関わり方などの実態を明らかにすること
- 子どもの大学選びや大学生活、就職活動などに対する、保護者のさまざまな関与の実態を明らかにすること

▶調査方法◀

インターネット調査

▶調査時期◀

2012年3月24日～27日

▶調査対象◀

全国の大学1～4年生の子どもをもつ保護者6,000名(父親3,000名、母親3,000名)。

インターネット調査会社の約130万人のモニター母集団のうち、子どもをもつ父親または母親(38歳～66歳)約40万人に対して予備調査を実施。このうち、大学生の子ども(18～24歳、日本の大学・海外の大学に通う場合を除く)をもつ父親または母親にアンケートの協力を依頼。子どもが在籍している大学の入試難易度(偏差値)*を「55以上」「50～54」「45～49」「45未満」の4つのグループに分け、父親全体3,000サンプル、母親全体3,000サンプルを確保することを目標に、それぞれのグループの人数比率にできるだけ近くなるようなサンプル構成を目指して回収を行った。

*大学の入試難易度(偏差値)は、2010年度 第3回ベネッセ・駿台マーク模試・11月B判定値(合格可能性60%以上80%未満)を用いた。

【本調査結果を読む際の留意点】

- ・図表タイトルに、子どもの学年の表記がない場合は、全学年を対象としている。
- ・本報告書で使用している百分比(%)は、小数点第2位以下を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。

目次

大学選択への関わり

- ① 子どもの大学選びへの関わり…… 4
- ② 大学選択で重視したこと…… 6

大学生活への期待

- ③ 大学時代に力を入れてほしいこと… 8
- ④ 大学での指導・支援への期待… 10

保護者と大学との関わり

- ⑤ 大学からの情報提供の
ニーズと現状…… 11
- ⑥ 保護者が利用・参加している
大学のサービス・イベント…… 12
- ⑦ 経済的負担の状況…… 13

子ども・大学生活への関わり

- ⑧ 子どもとの会話…… 14
- ⑨ 大学生活の心配ごと…… 16
- ⑩ 子どもとの関わりに対する意識 18

就職・進路選択への関わり

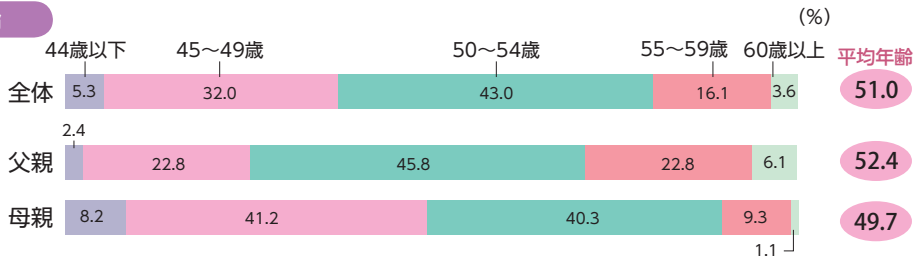
- ⑪ 就職・進路に対する保護者の意識
…… 19
- ⑫ 就職・進路選択への関与…… 20

海外留学

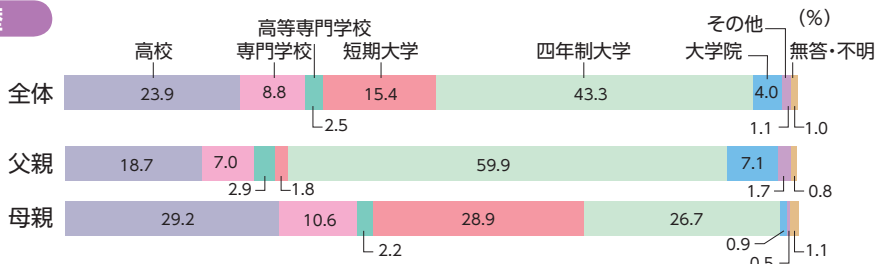
- ⑬ 海外留学に対する意識…… 22

回答者の属性

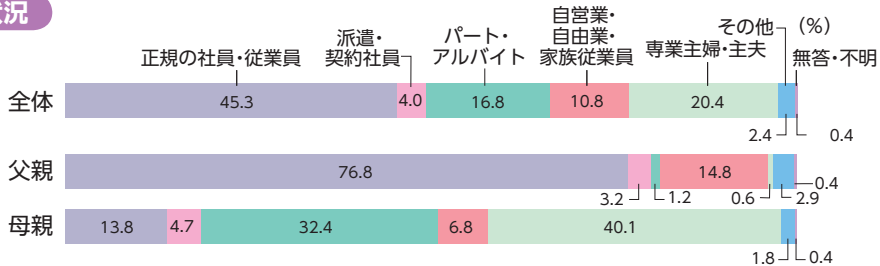
年齢



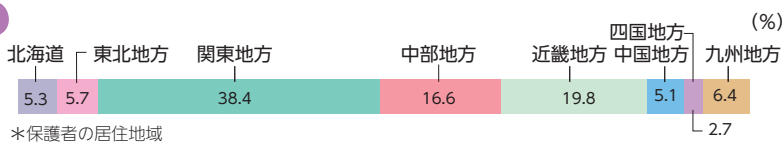
学歴



就業状況



居住地域



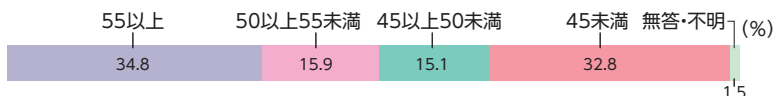
子どもの性別



子どもの学年

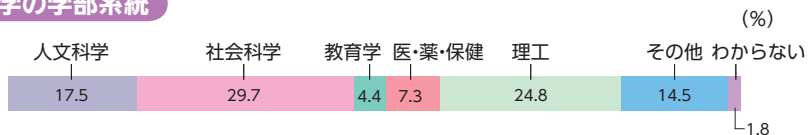


子どもの大学の入試難易度



*大学の入試難易度(偏差値)は、2010年度 第3回ベネッセ・駿台マーク模試・11月 B判定値(合格可能性60%以上80%未満)を用いた。

子どもの大学の学部系統



*人文学部には、人文系統と外国語学系統、国際学系統を含む。社会科学には、法学、経済学、社会学系統を含む。

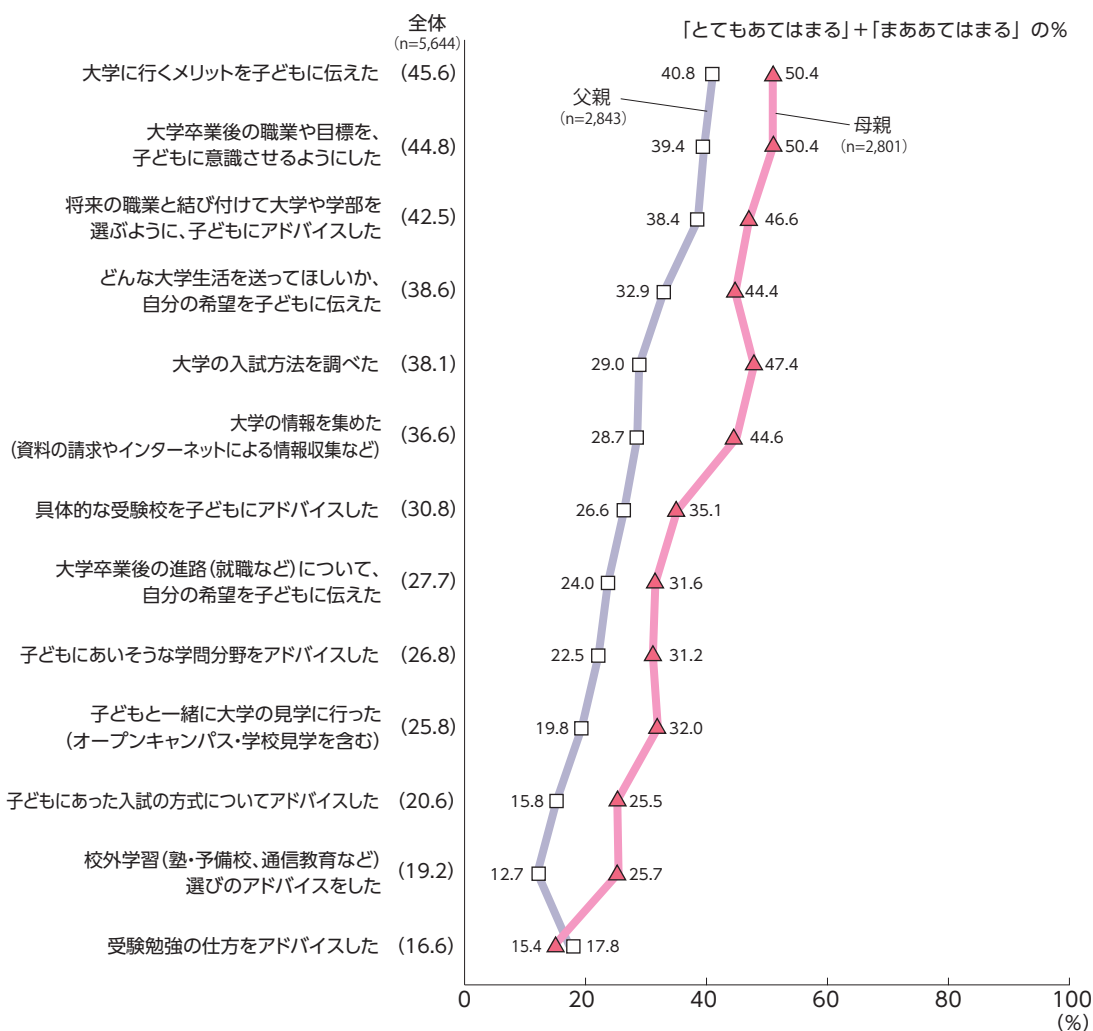
① 子どもの大学選びへの関わり

母親は父親よりも様々な面で子どもの大学選びに関与。

Q

お子様の大学選びに関して、あなたご自身には次のようなことがどの程度あてはまりましたか。

図 1-1 子どもの大学選びへの関わり(父母別)

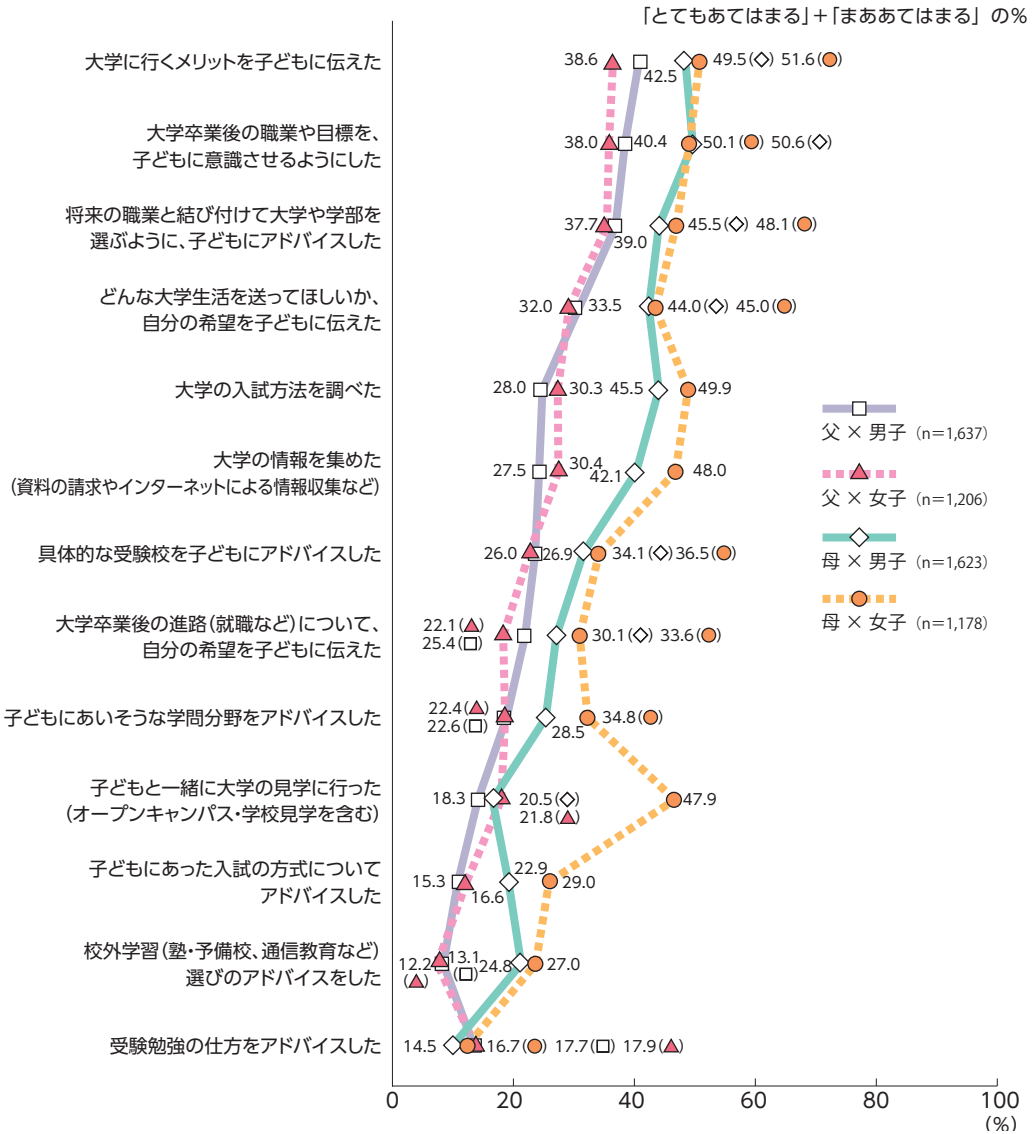


注)子どもが大学の附属校からの内部進学である保護者は含まない。

子どもが大学選びをする際、母親は父親よりも、様々な面で子どもに関わっていたと回答している。特に、「大学の入試方法を調べた」母親の比率は47.4%（「とても+まああてはまる」の%、以下同）で、父親よりも18.4ポイント高く、「大学の情報を集めた(資料の請求やインターネットによる情報収集など)」では15.9ポイント、「校外学習(塾・予備校など) 選びのアドバイスをした」では、13.0ポイント高くなっている。唯一、「受験勉強の仕方のアドバイスをした」では、父親の比率が母親を上回っている。

オープンキャンパスなどの大学見学へは、子どもが女子の場合は、5割弱の母親が一緒に行っているが、男子では2割程度。

図 1-2 子どもの大学選びへの関わり(父母×子どもの性別)



注)子どもが大学の附属校からの内部進学である保護者は含まない。

子どもの性別に、父母の大学選びへの関わり度合いをみてみると、違いが大きいのは「子どもと一緒に大学の見学に行った(オープンキャンパス・学校見学を含む)」で、子どもが女子の場合、母親の47.9%が「あてはまる」(とても+まああてはまる)と答えている。子どもが男子だと20.5%である。その他にも母親では、男子より女子の方が関わり度合いの大きい項目がいくつかみられるが、父親は、子どもの性別による関わり度合いの違いはあまりみられない。

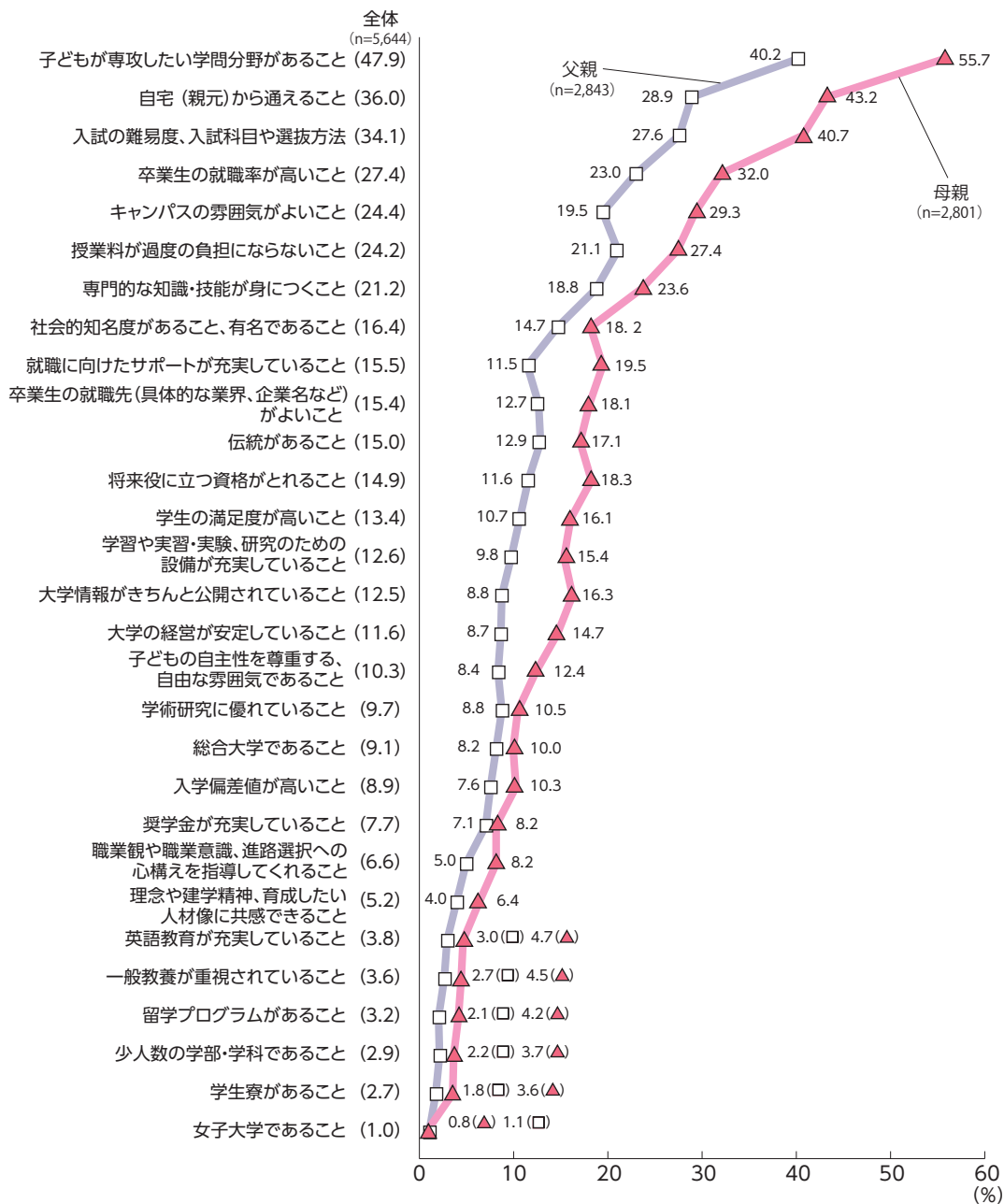
② 大学選択で重視したこと

保護者が重視しているのは「子どもが専攻したい学問分野があること」、次いで「自宅(親元)から通えること」。

Q

次の中であなたご自身が、お子様が受験する大学・学部を選んだ時に重視した項目についてあてはまるものを全てお選びください。

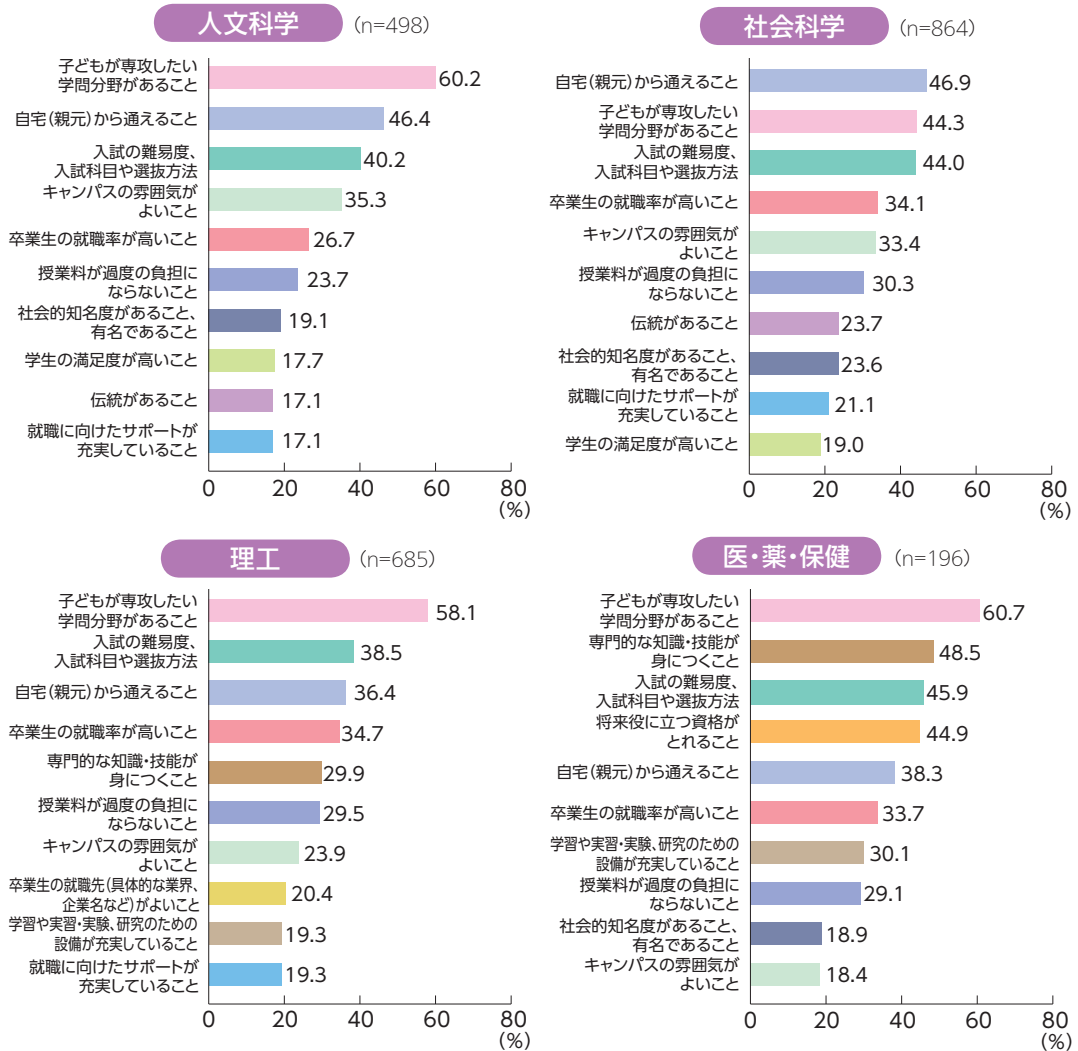
図2-1 子どもの大学選択で重視したこと(父母別)



注) 図2-1~2は子どもが大学の附属校からの内部進学である保護者は含まない。

「子どもが専攻したい学問分野があること」は「人文科学」「医・薬・保健」「理工」系統では約6割が重視しているが、「社会科学」系統では4割台。

図2-2 子どもの大学選択で重視したこと（母親・子どもの学部系統別・上位10項目）



注)学部系統別の集計対象はサンプル数の多い4学部系統のみとし、その他は省略している。学部系統の詳細はp.3を参照。

保護者が子どもの大学選択において重視したことをたずねた結果をみると、まず、全体に母親の方が関心の高い様子がうかがえる(図2-1)。父母ともに最も高いのは、「子どもが専攻したい学問分野があること」である。これを子どもの学部系統別に、関心の高い母親の方のデータでみると、「人文科学」「理工」「医・薬・保健」系統では6割前後が重視したと回答しているのに対し、「社会科学」系統では5割を下まわっており、「自宅(親元)から通えること」の方がわずかに高くなっている(図2-2)。また、「専門的な知識・技能が身につくこと」は「医・薬・保健」系統では約5割と高いのに対し、「人文科学」「社会科学」系統では上位10項目に入っていない(人文科学15.4%、社会科学12.3%)。

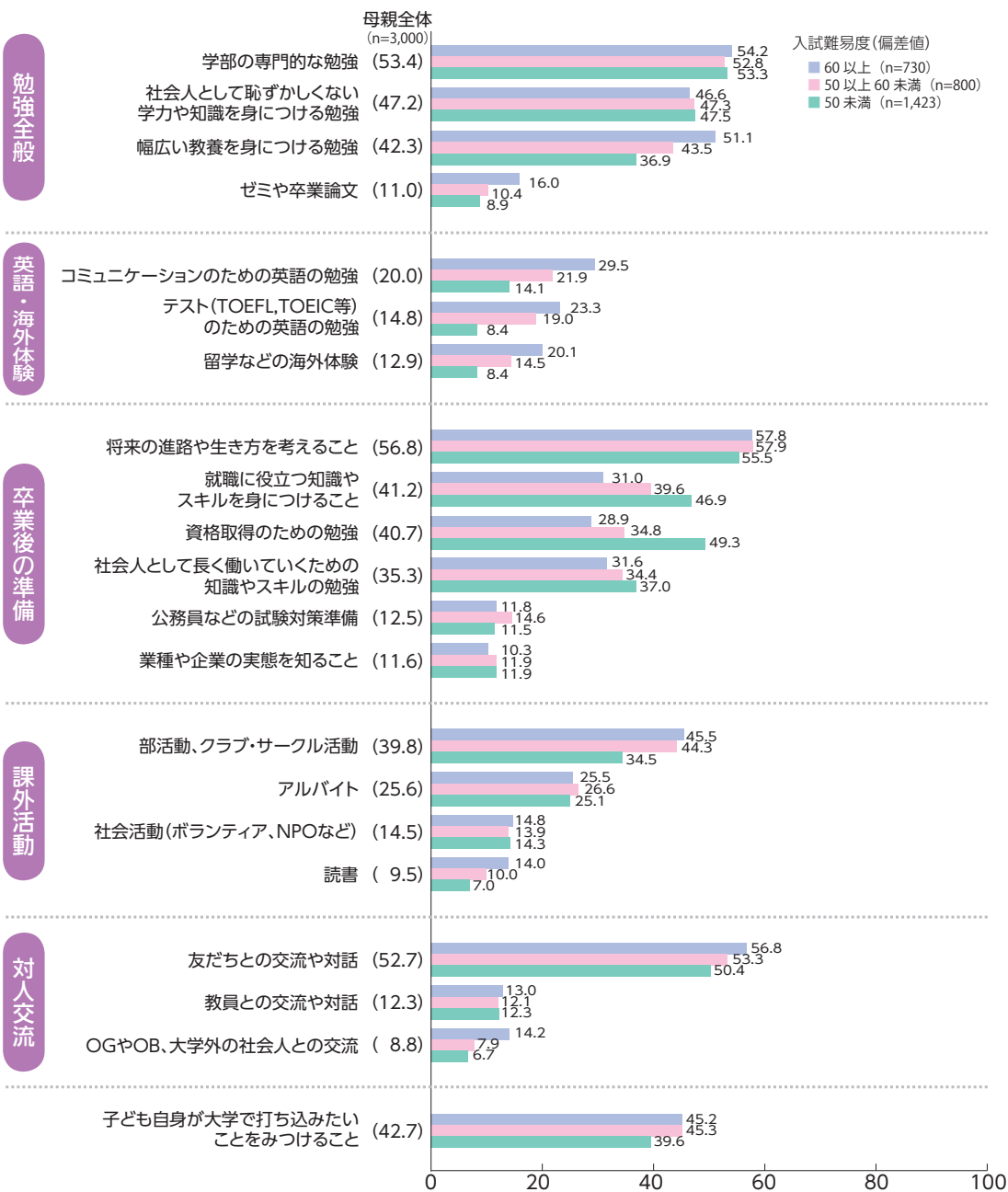
③ 大学時代に力を入れてほしいこと

「将来の進路や生き方を考えること」「学部の専門的な勉強」が、子どもの大学の入試難易度によらず、母親が力を入れてほしいと思っていること。

Q

入学時を振り返って考えると、あなたはお子様に大学時代にどのようなことに力を入れてほしいと思っていましたか。あてはまるもの全てをお選び下さい。

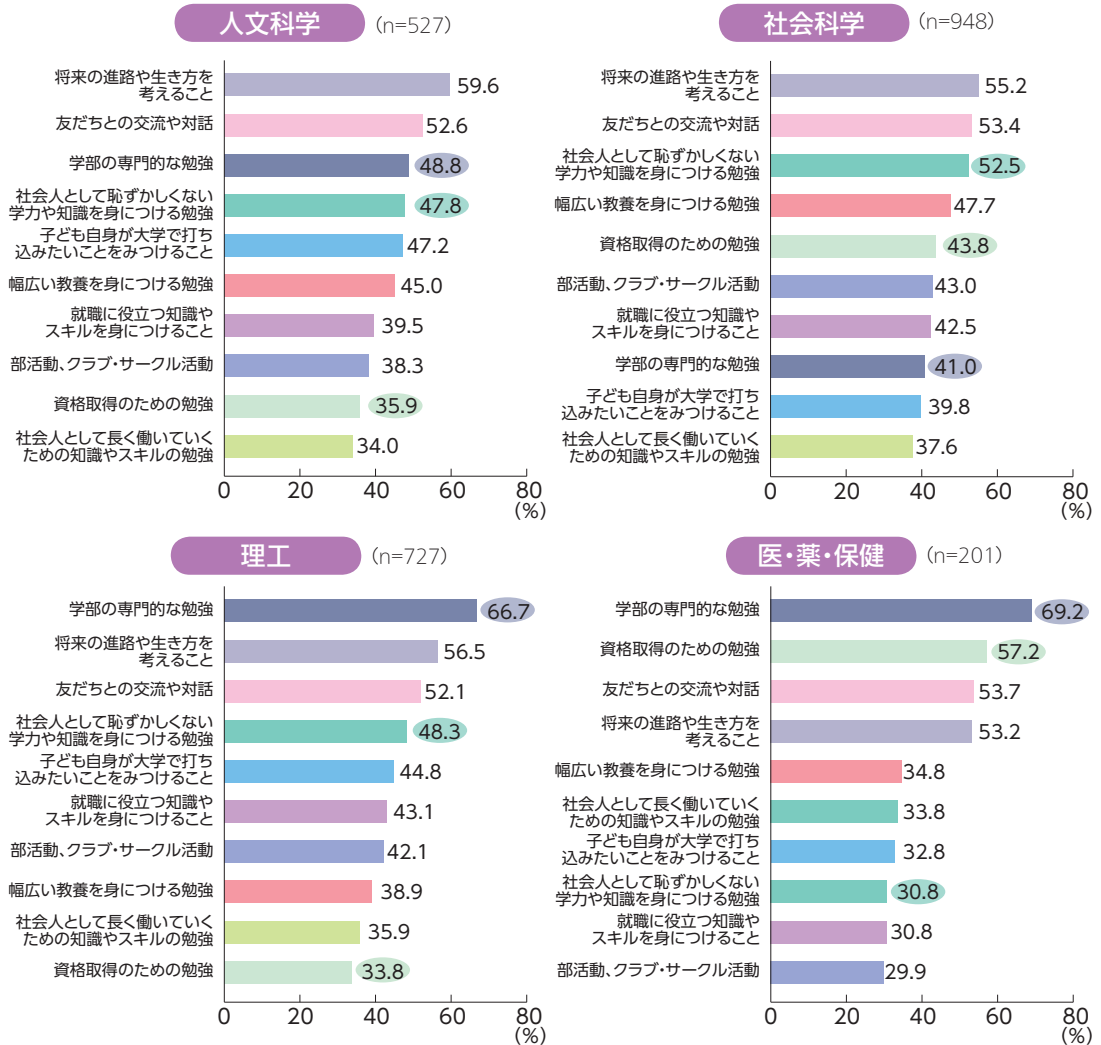
図3-1 大学時代に力を入れてほしいこと(母親・子どもの大学の入試難易度別)



注)この章(図3-1~2、図4-1)では、父親より母親の方が全体に回答選択率が高いことから、母親のデータで分析を行っている。

文系学部では理系学部と異なり「学部の専門的な勉強」よりも「将来の進路や生き方を考えること」に期待している。

図3-2 大学時代に力を入れてほしいこと(母親・子どもの大学の学部系統別)



注1) 網かけは、各学部間でポイント差の大きい項目

注2) 学部系統別の集計対象はサンプル数の多い4学部系統のみとし、その他は省略している。学部系統の詳細はp.3を参照。

大学時代に力を入れてほしいこととして、母親の選択率の高い項目は「将来の進路や生き方を考えること」(56.8%)、「学部の専門的な勉強」(53.4%)で、子どもの大学の入試難易度によらず高い。一方、「幅広い教養を身につける勉強」は入試難易度が高い大学ほど高く、逆に「資格取得のための勉強」「就職に役立つ知識やスキルを身につけること」といった卒業後の準備に関することは入試難易度の低い大学で高くなっている(図3-1)。4つの学部系統別にみると、「医・薬・保健」「理工」系統では「学部の専門的な勉強」が最も高く、それぞれ69.2%、66.7%であるが、「人文科学」「社会科学」系統ではそれぞれ48.8%、41.0%にとどまり、最も高いのは「将来の進路や生き方を考えること」(59.6%、55.2%)となっている(図3-2)。

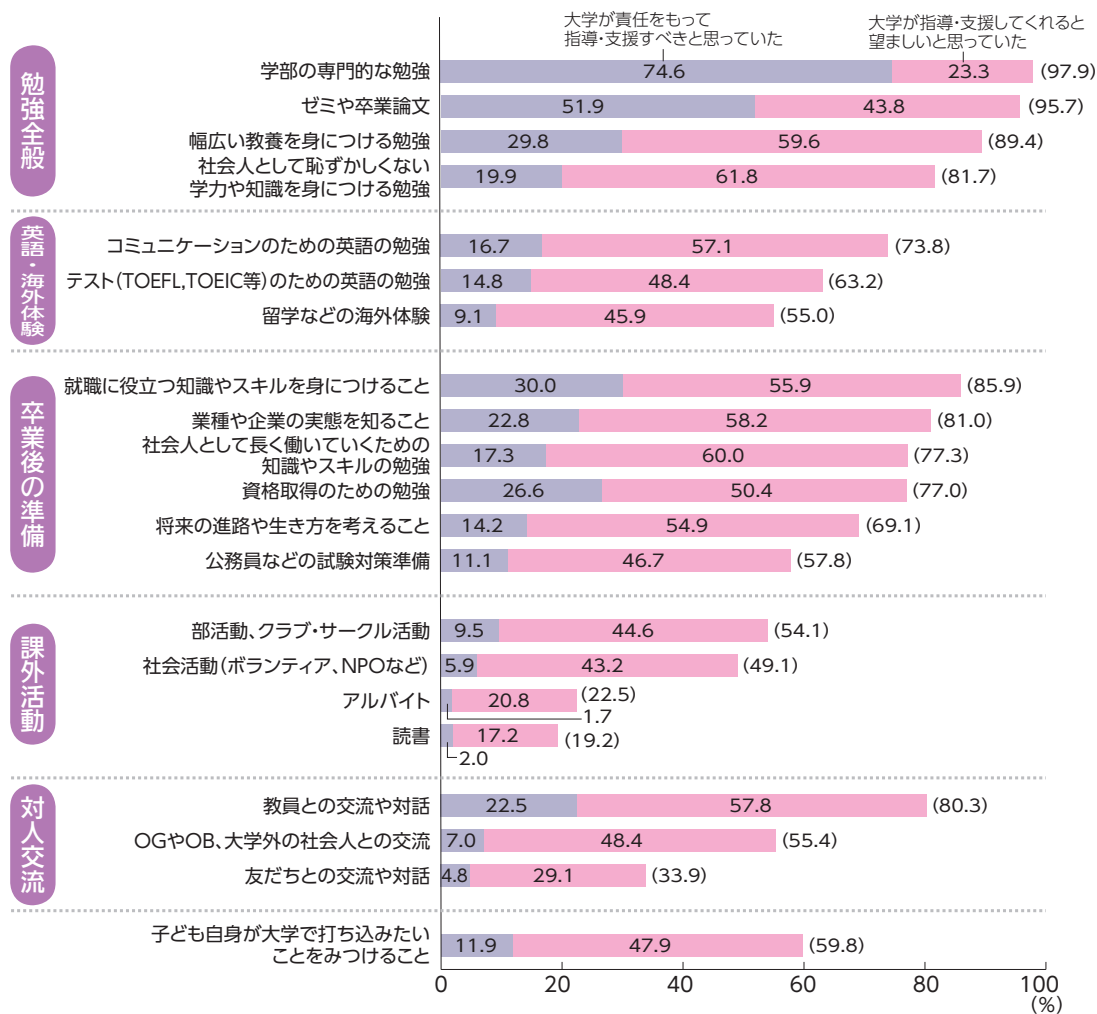
④ 大学での指導・支援への期待

就職に関する指導・支援への保護者の期待は高い。

Q

入学時を振り返って考えると、あなたは以下のことについて、大学がどれぐらい指導や支援をするのがよいと思っていましたか。

図4-1 大学の指導・支援に対する意識(母親)



注1) 選択肢のうち「大学に指導や支援は、全く期待していなかった」は省略している。

注2) ()内の値は「大学が責任をもって指導・支援をすべきと思っていた」「大学が指導・支援してくれると望ましいと思っていた」の合計値。

注3) サンプル数は3,000名。

大学での指導・支援に対して、選択肢「大学で責任をもって指導・支援すべきと思っていた」と「大学が指導・支援してくれると望ましいと思っていた」の合計値をみると、「学部の専門的な勉強」「ゼミや卒業論文」「幅広い教養を身につける勉強」といった大学の本来の役割を表す項目群の次に高かったのが、「就職に役立つ知識やスキルを身につけること」(85.9%)、「業種や企業の実態を知ること」(81.0%)といった就職の準備に関することであった。「就職に役立つ知識やスキルを身につけること」は「大学で責任をもって指導・支援すべき」と考えている割合が3割に及ぶ。

⑤ 大学からの情報提供のニーズと現状

保護者がほしい情報は「卒業生の詳細な就職率、就職先」。
5割強の保護者が情報提供はあったが十分ではないと感じている。

Q

お子様に通っている大学から提供してほしいと思う情報はどれですか。(複数回答)

Q

お子様に通っている大学から今まで十分な情報が提供されてきましたか。

図5-1 大学から提供してほしいと思う情報(全体・父母別)

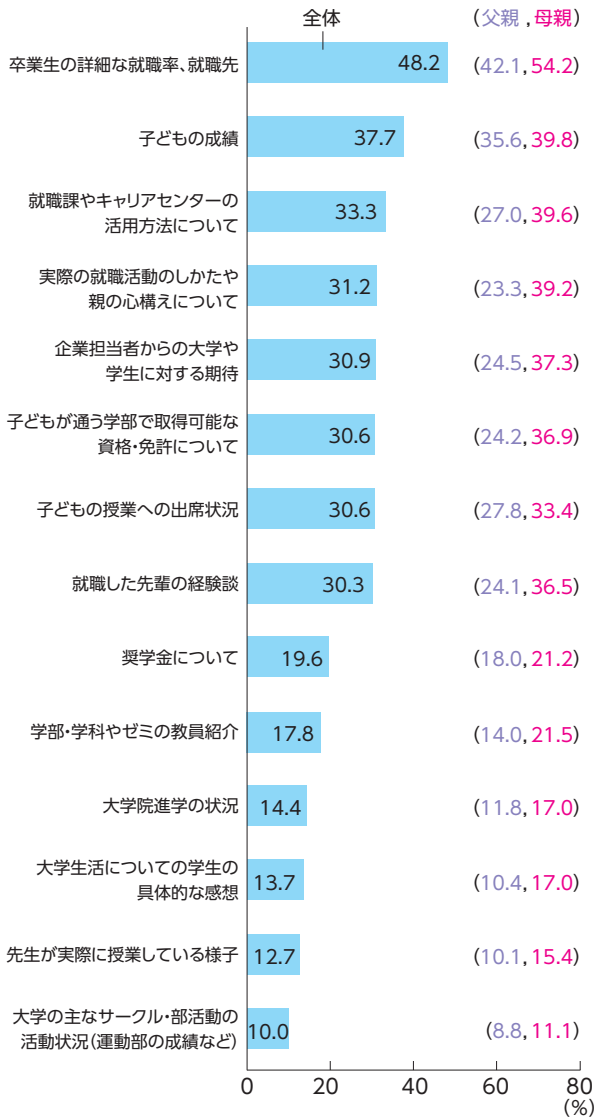
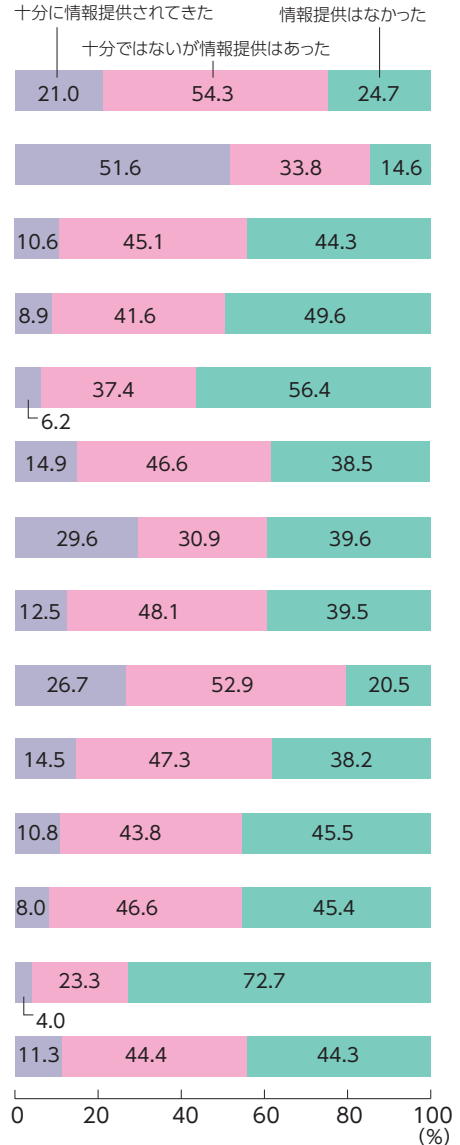


図5-2 大学からの情報提供(全体)



注) サンプル数は図5-1・5-2とも6,000名。うち父親3,000名、母親3,000名。

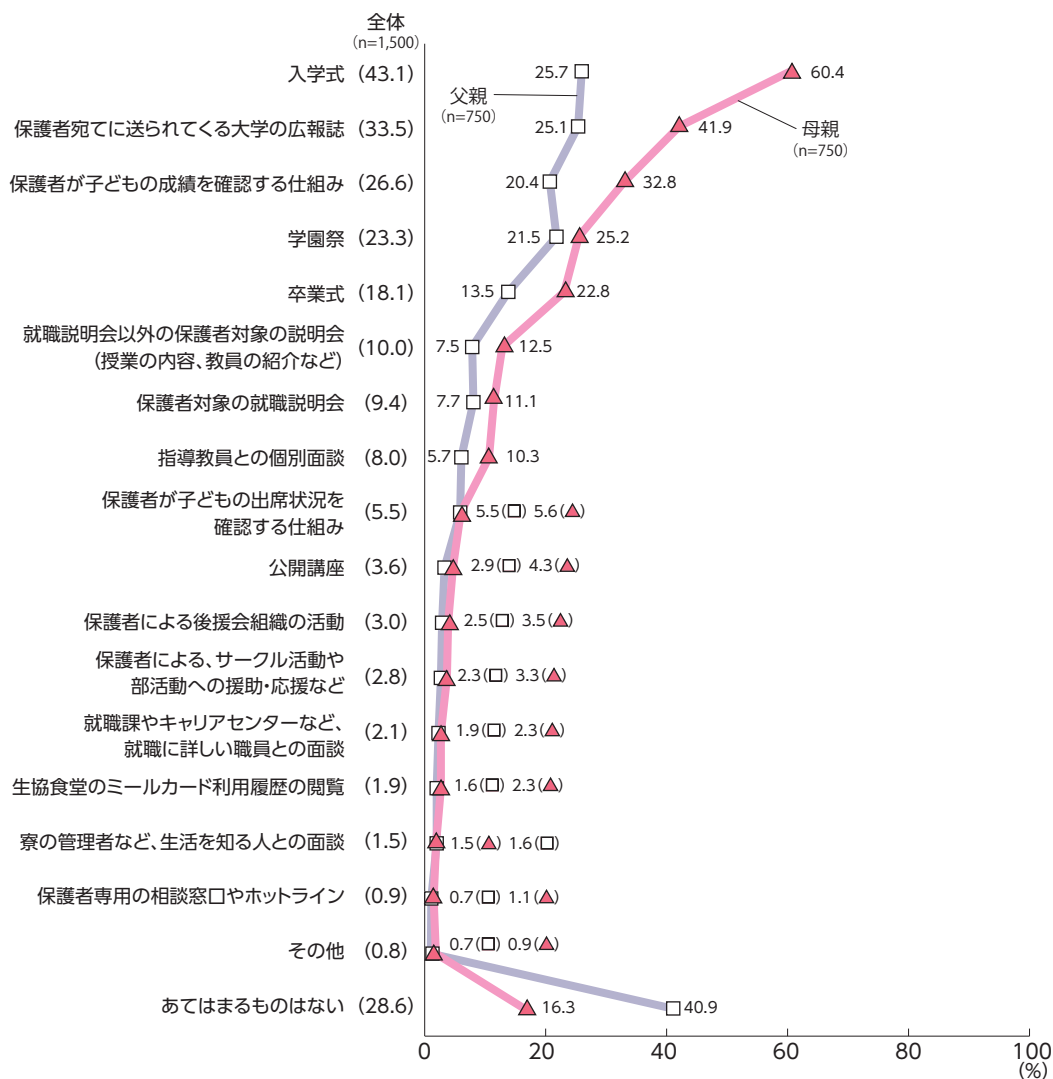
⑥ 保護者が利用・参加している大学のサービス・イベント

保護者対象の説明会の利用は、「就職説明会」「就職説明会以外説明会」のいずれも1割程度。

Q

次にあげる大学の取り組みのなかで、実際にあなたご自身が参加したり利用したりしたものがあれば、全てお選びください。

図6-1 保護者が参加・利用した大学サービス・イベント（4年生の保護者・父母別）



父母別にみると、母親の方が大学のサービス・イベントの利用・参加率が高い。「入学式」には母親の6割が出席し、「学園祭」には母親の4人に1人(25.2%)が参加している。一方、父親の4割は「あてはまるものはない」と回答しており、大学との直接的な接点もっていないようである。

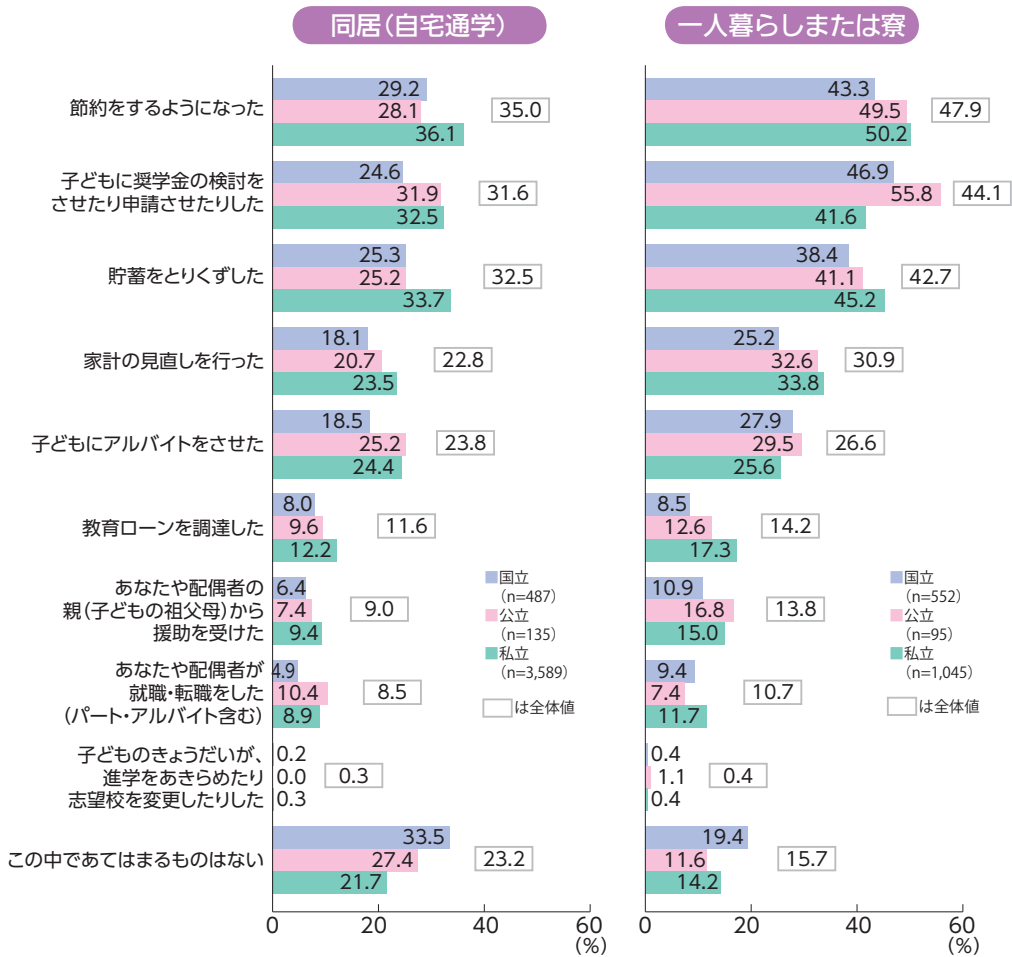
⑦ 経済的負担の状況

子どもに奨学金の検討または申請をさせたのは、子どもが一人暮らしまたは寮生活をしている家庭で5割弱、自宅通学の家庭で3割。

Q

お子様の大学進学が決まってから今までの間に、お子様の学費や生活費を工面するためにあなたやご家族は次のようなことをしましたか。あてはまるものを全て選んでください。

図7-1 子どもの大学進学決定後の学費・生活費の工面(子どもの居住形態別×設置者別)



経済的負担の状況を子どもの居住形態別にみると、「同居」に比べて、子どもが「一人暮らしまたは寮」の方が「節約をするようになった」「子どもに奨学金の検討をさせたり申請させたりした」「貯蓄をとりくずした」が10ポイント以上高い。子どもの大学の設置者別にみると、国立大学の負担が若干少なくなっている項目が多く、「この中であてはまるものはない」の選択率をみても、国立大学で「同居」の場合に33.5%と最も高く、お金の工面の必要性のない家庭が相対的に多いものと思われる。

⑧ 子どもとの会話

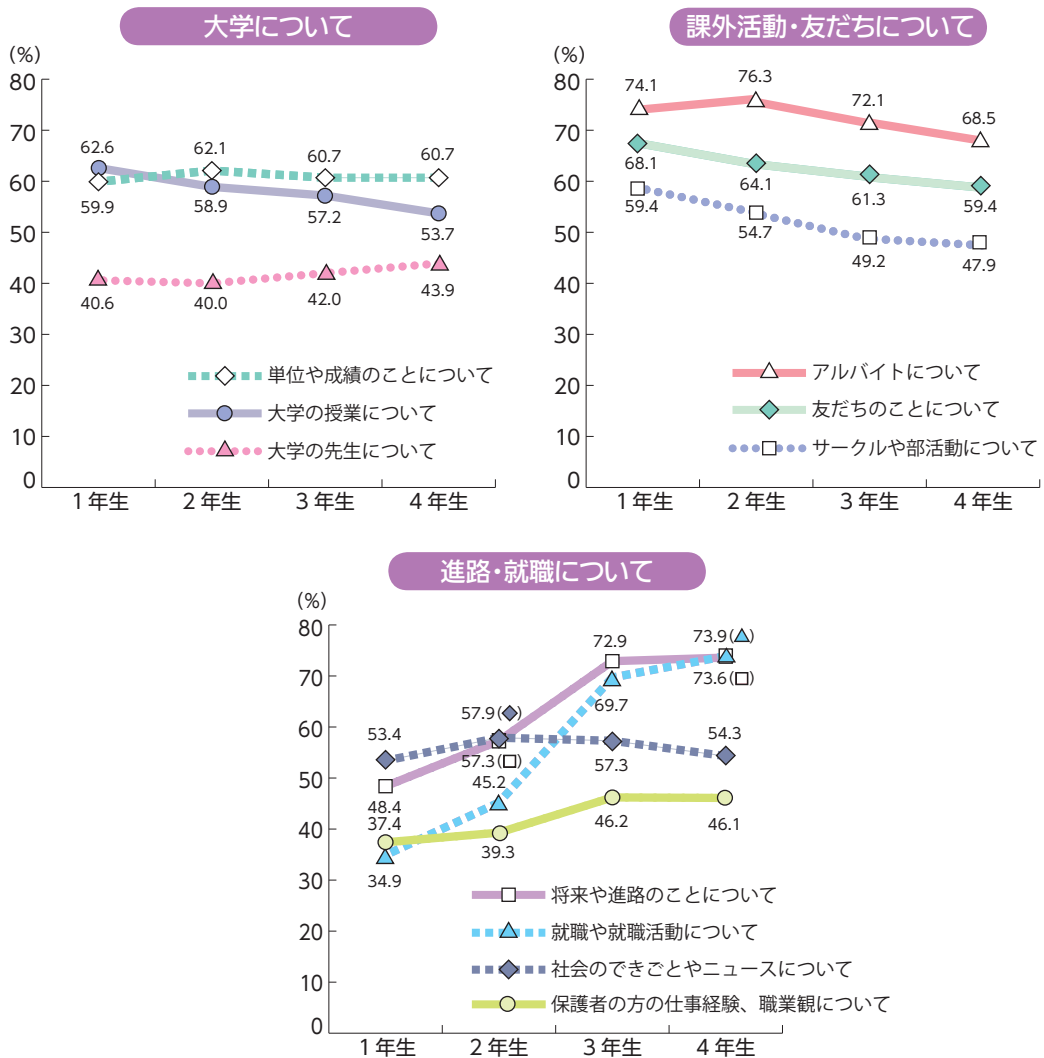
授業、サークル・部活、友だちの話題は、学年を追うごとに低下。一方、将来や進路、就職や就活の話題は、2年から3年で急上昇し、親子の中心的话题に。

Q

今年度1年間を振り返って、あなたは、お子様とどのくらい話をしていましたか。それぞれについてあてはまるもの1つをお選びください。

図8-1 子どもとの会話(学年別)

「よく話をした」+「ときどき話をした」の%



注) サンプル数は各学年1,500名。

「大学の授業」「サークルや部活動」「友だち」に関する親子の会話の頻度は、高学年ほど低下する傾向がみられる。一方で、「将来や進路」「就職や就職活動」を子どもとの会話の話題にした保護者の比率は、大学1・2年生では3～4割台であるが、3・4年生になると約7割と急増する。

子どもと会話をしているのは父親より母親。子どもは女子の方が話をする頻度が高い。

図8-2 子どもとの会話〈大学、課外活動・友だちについて〉(1~4年生の保護者・父母別・父母×子どもの性別)

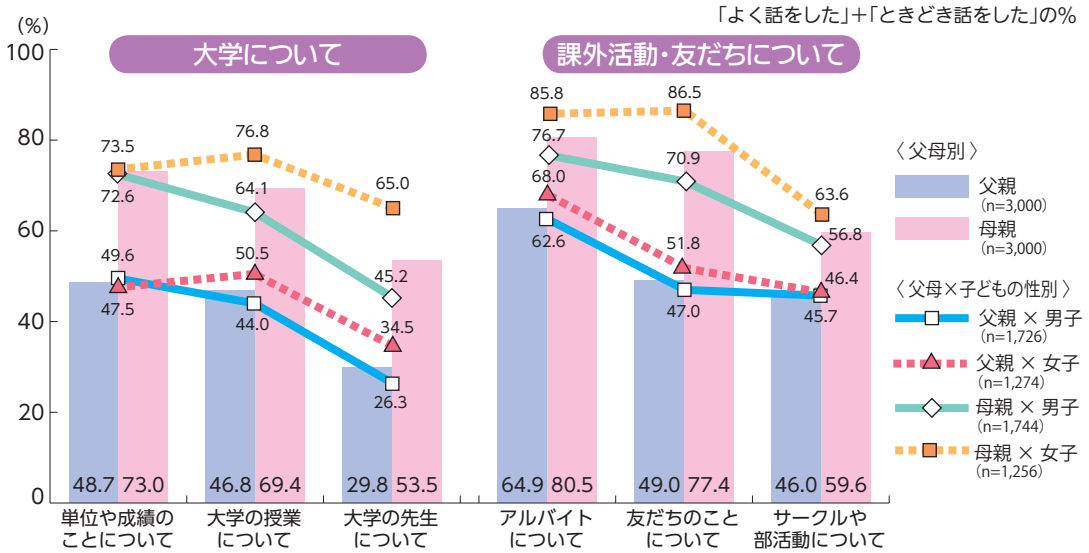
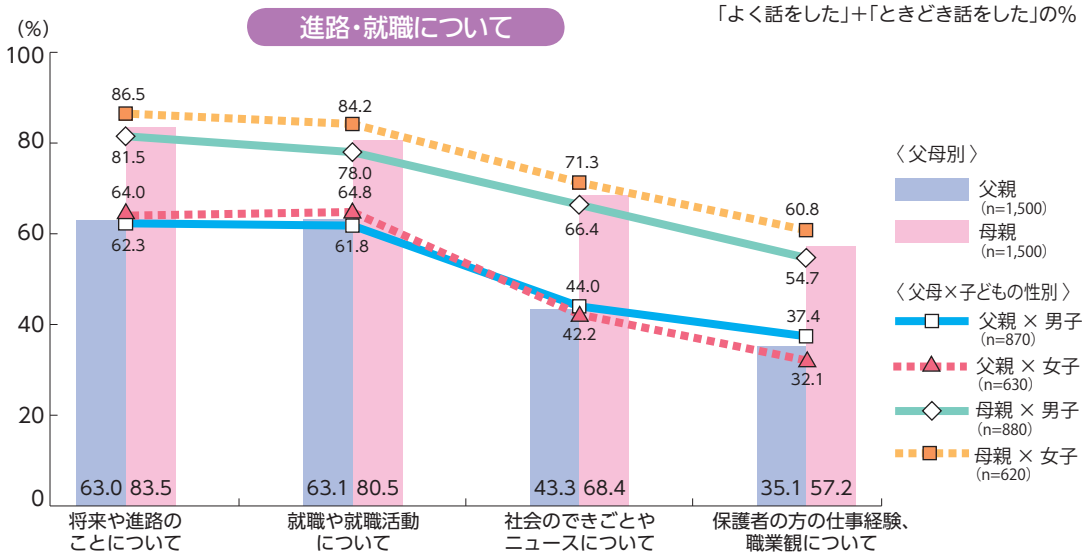


図8-3 子どもとの会話〈進路・就職について〉(3・4年生の保護者・父母別・父母×子どもの性別)



父親より母親の方が子どもとの会話の頻度が高く、特に「友だちのこと」に関しては28.4ポイントの違いがみられる。子どもの性別では、「母親×女子」の組み合わせが最も会話の頻度が高い。進路・就職に関する会話について、3・4年生の保護者のデータをもても、同様に母親の方が多く会話をしており、「保護者の方の仕事経験、職業観について」も母親57.2%に対し、父親は35.1%。父親は子どもの就職にあたって自身の仕事の経験などを積極的に語ってはいないようだ。

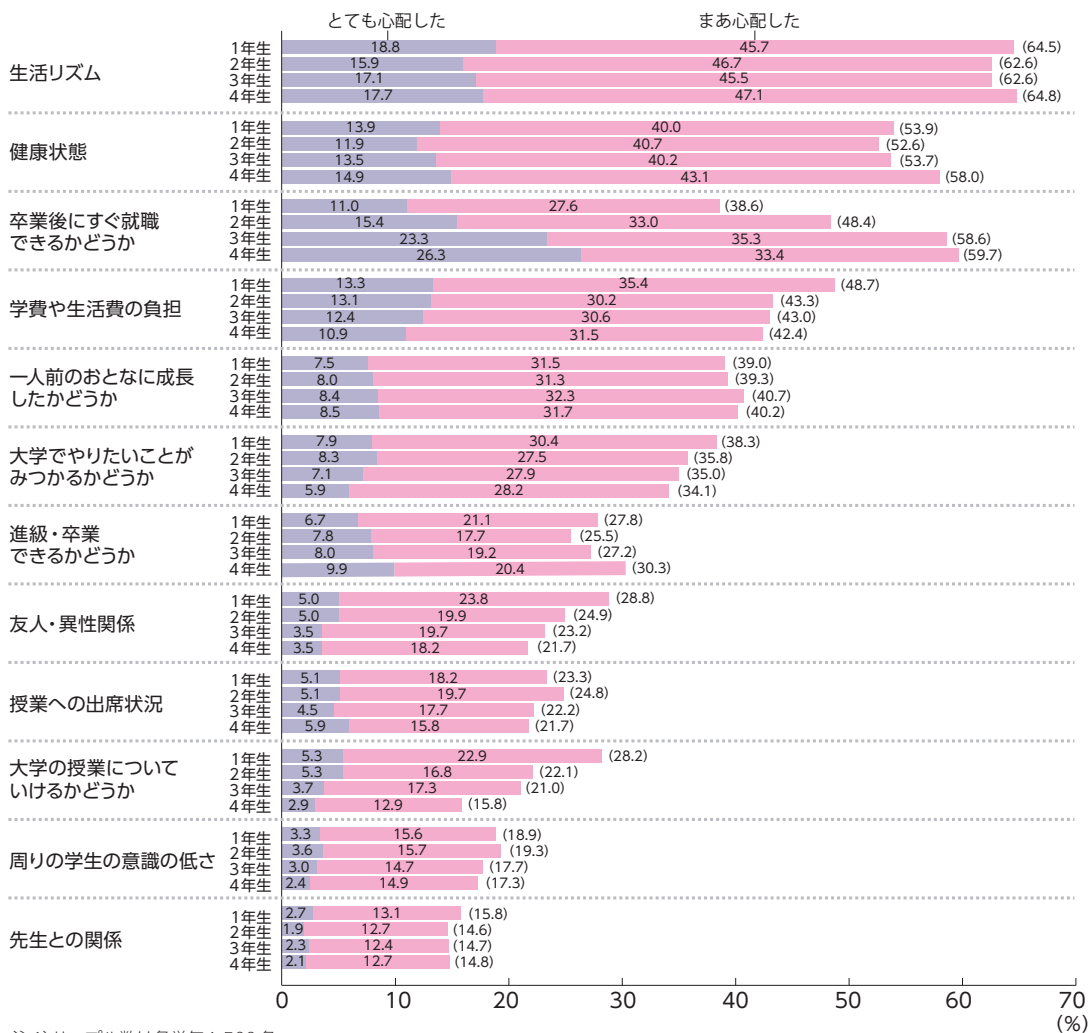
⑨ 大学生生活の心配ごと

大学3・4年生になると「卒業後にすぐ就職できるかどうか」が「生活リズム」「健康状態」となる心配ごとに。

Q

今年度1年間を振り返って、あなたのお子様のことについて、次のようなことが心配になりましたか。

図9-1 大学生生活の心配ごと(学年別)



注1) サンプル数は各学年1,500名。

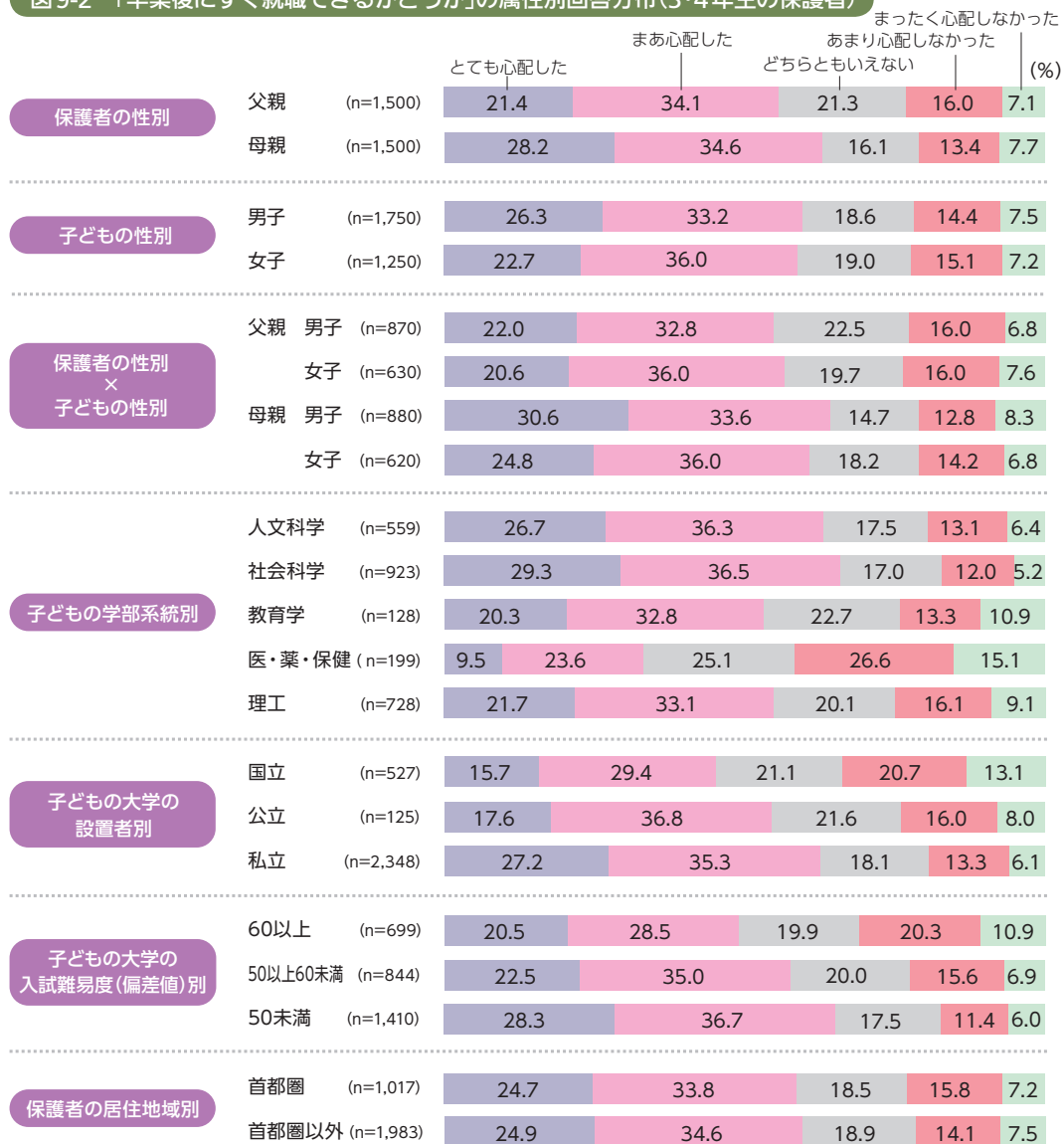
注2) 選択肢は、「とても心配した」「まあ心配した」「どちらともいえない」「あまり心配しなかった」「全く心配しなかった」の5段階。「どちらともいえない」以下は省略している。

注3) () の値は「とても心配した」と「まあ心配した」の合計値。

大学生の子どもの「生活リズム」「健康状態」を心配する保護者は、どの学年でも、5～6割台と高い。しかし、「卒業後にすぐに就職できるかどうか」を心配する保護者は、1・2年時では半数未満となっているものの、3・4年時では6割近くとなり、「生活リズム」や「健康状態」となる保護者の心配ごととなっている。

「卒業後にすぐ就職できるかどうか」心配しているのは父親より母親。
3・4年生の男の子をもつ母親のほぼ3人に1人が「とても心配」。

図9-2 「卒業後にすぐ就職できるかどうか」の属性別回答分布(3・4年生の保護者)



注1) 学部系統別の分析はサンプル数の多い5学部系統のみとし、その他は省略している。学部系統の詳細はp.3を参照。

注2) 入試難易度の詳細はp.3を参照。

注3) 「首都圏」は東京・神奈川・埼玉・千葉の1都3県としている。

卒業後すぐ就職できるかどうかを心配に思っている割合(「とても+まあ心配した」の%)は父親(55.5%)より母親(62.8%)の方が高く、男の子をもつ母親では3割が「とても心配した」(30.6%)と回答している。属性別に「とても心配した」の値をみると、学部系統別には「社会科学」系統(29.3%)、大学の設置者別には私立大学(27.2%)、入試難易度別には偏差値「50未満」(28.3%)で高くなっている。保護者の居住地域による違いはみられなかった。

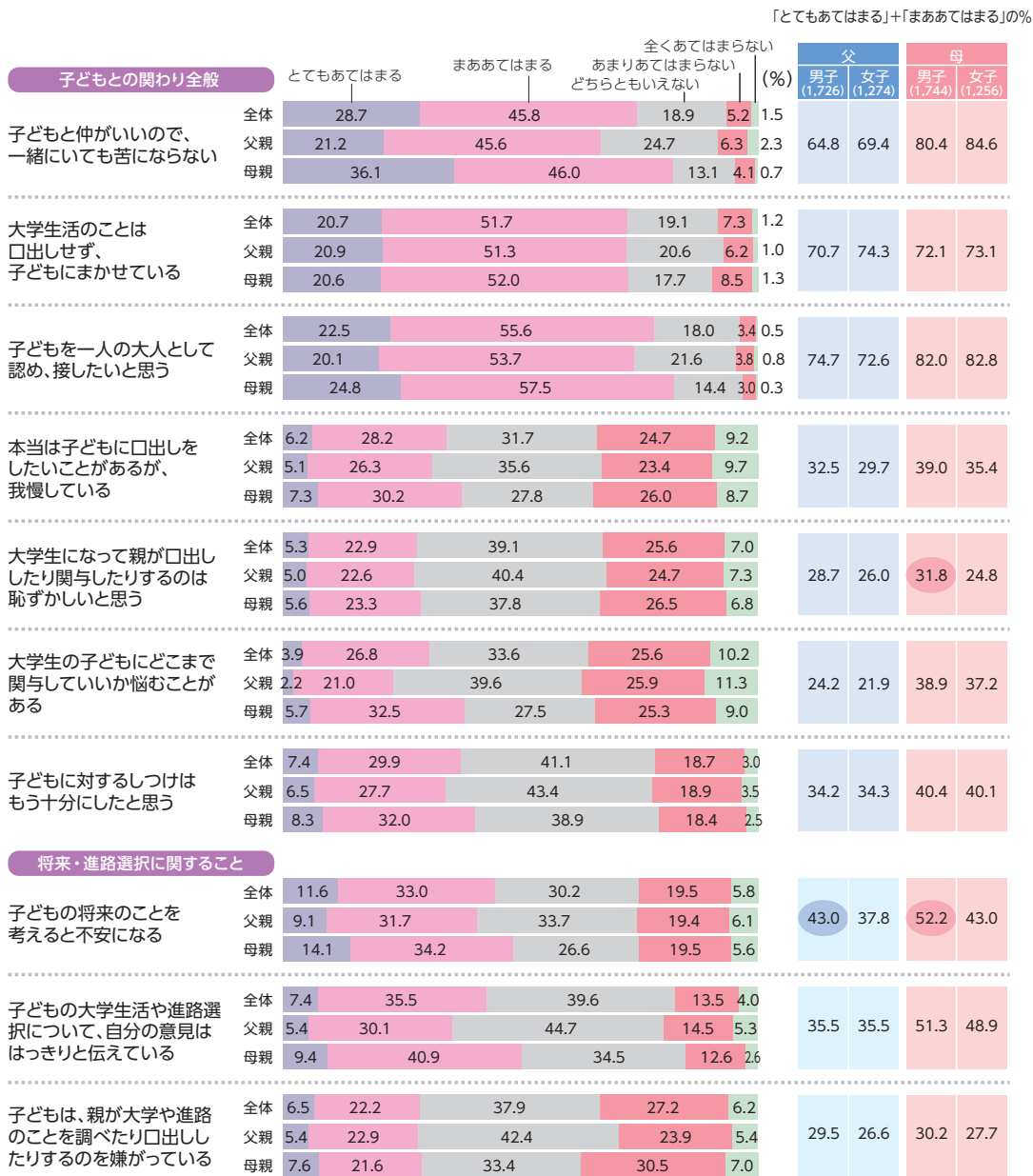
⑩ 子どもとの関わりに対する意識

「大学生活のことは口出しせず子どもにまかせている」保護者が7割。
一方で、「本当は子どもに口出しをしたいことがあるが我慢している」が3割。

Q

お子様とあなたご自身との関係について、もっとも近いものを1つずつお選びください。

図 10-1 親子関係についての意識(全体・父母別・父母×子どもの性別)



注1) サンプル数は、全体6,000名、うち父親3,000名、母親3,000名。父母×子どもの性別のサンプル数は()内の値。
 注2) 父母×子どもの性別の値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計値。
 注3) 父母×子どもの性別の値の●●は、父母それぞれにおいて、子どもの性別に5ポイント以上高い値。

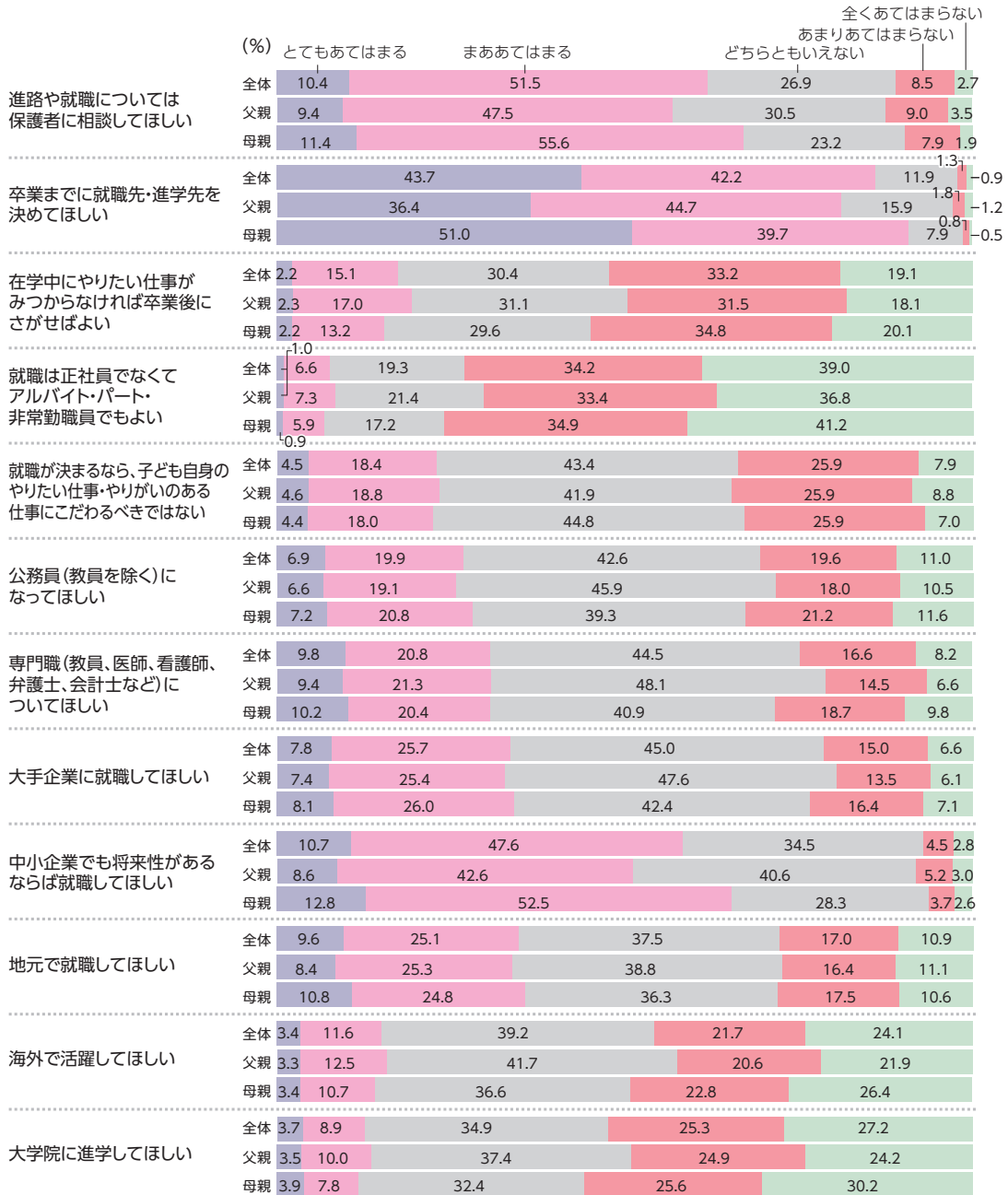
⑪ 就職・進路に対する保護者の意識

子どもに「海外で活躍してほしい」と考えている保護者は15.0%、否定的な保護者が45.8%。

Q

お子様の大学卒業後の進路や就職に関するあなたご自身のお考えとして、あてはまるものを1つ選んでください。

図 11-1 子どもの卒業後進路に対する保護者の考え(1~3年生の保護者・全体・父母別)



注) サンプル数は全体4500名。うち父親2,250名、母親2,250名。

⑫ 就職・進路選択への関与

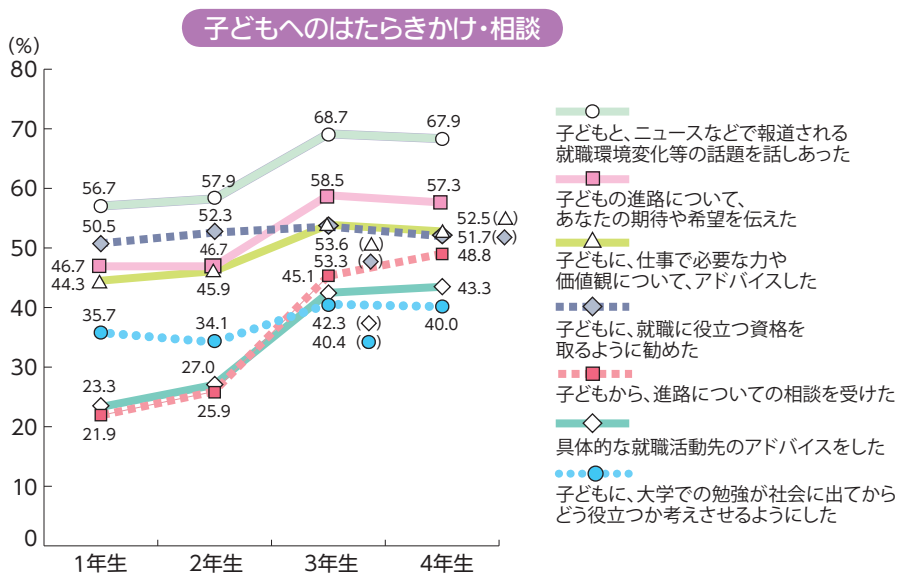
4年生の保護者の4割が子どもの進路に関する情報収集をしたと回答。
一方で、就職に関して親ができることは少ないと感じた保護者が7割。

Q

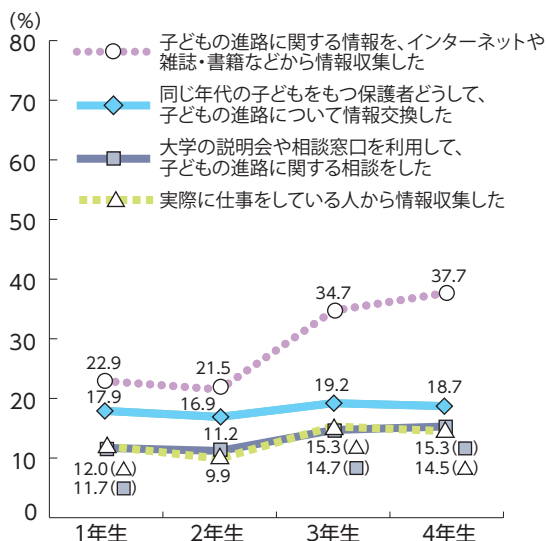
今年度1年間を振り返って、お子様の大学卒業後の進路(就職、大学進学等)について、あなたご自身は次のようなことがありましたか。

図 12-1 進路への関与(学年別)

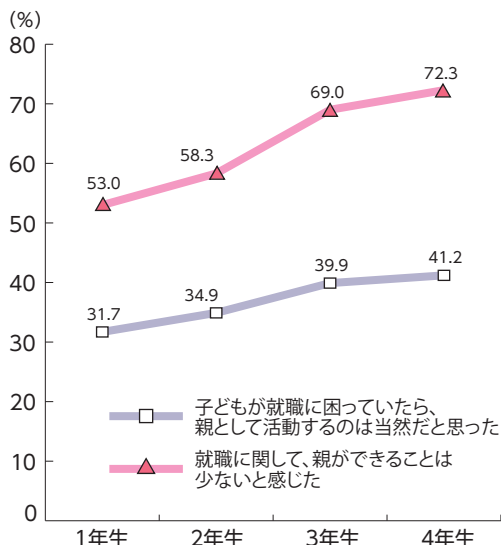
「よくあった」+「ときどきあった」の%



保護者による情報収集



就職への関与についての意識

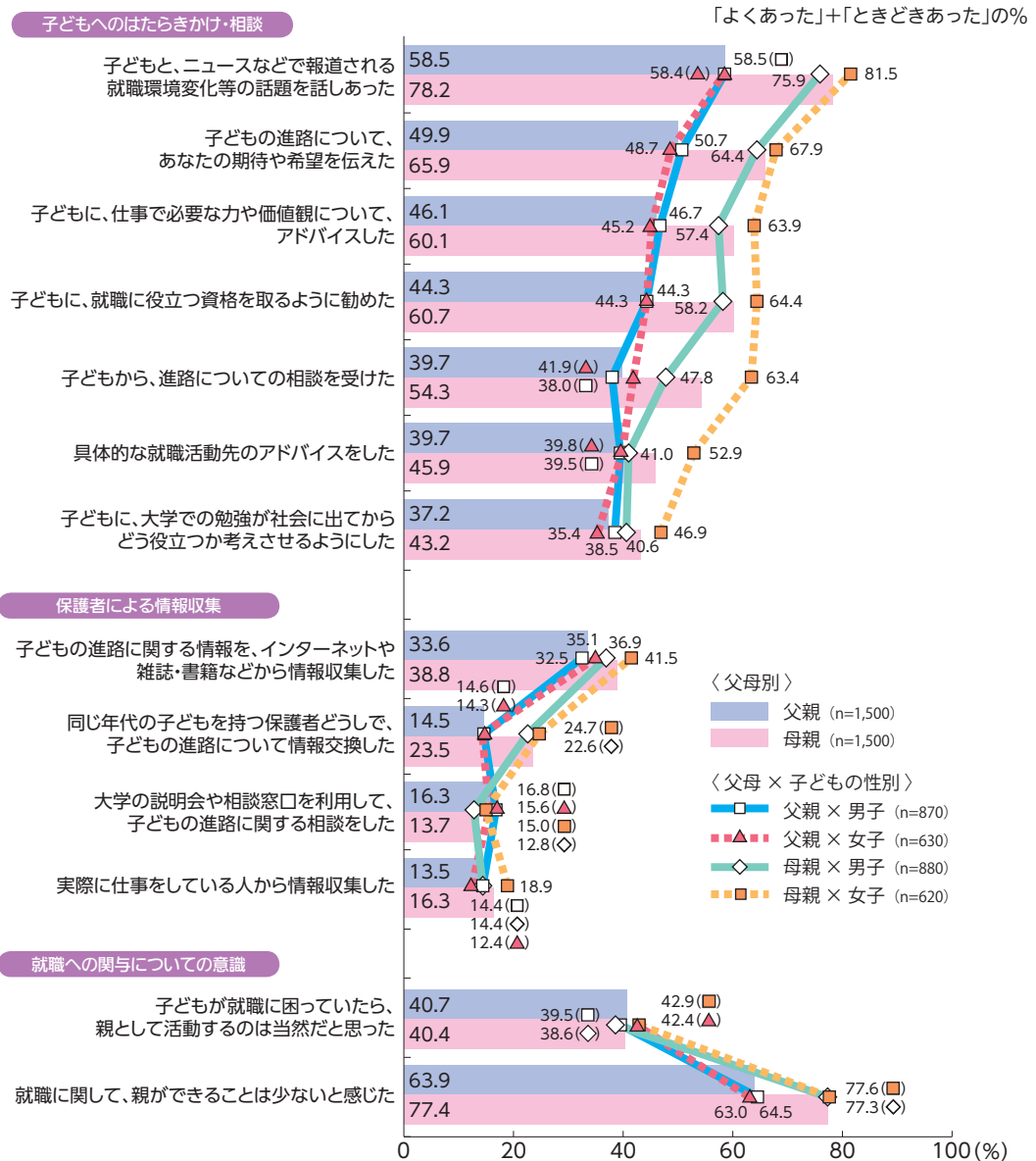


注1) サンプル数は各学年1,500名。

注2) 選択肢は「よくあった」「ときどきあった」「あまりなかった」「まったくなかった」の4段階。

3・4年生の女の子をもつ母親の63.4%が進路について相談を受けているが、男の子だと47.8%。父親は男女とも4割前後。

図 12-2 進路への関与(3・4年生の保護者・父母別・父母×子どもの性別)



就職・進路に関して、インターネットや雑誌などから情報収集をした保護者は1年生で22.9%、4年生では37.7%にのぼる。その一方で、「就職に関して親ができることは少ないと感じた」比率も1年生で53.0%、4年生で72.3%と上の学年ほど高くなっている(図 12-1)。また、保護者の性別では、子どもへのはたらきかけや相談に関する項目は、父母で関与の度合いがかなり異なっており、「母親×女子」で高くなっている(図 12-2)。

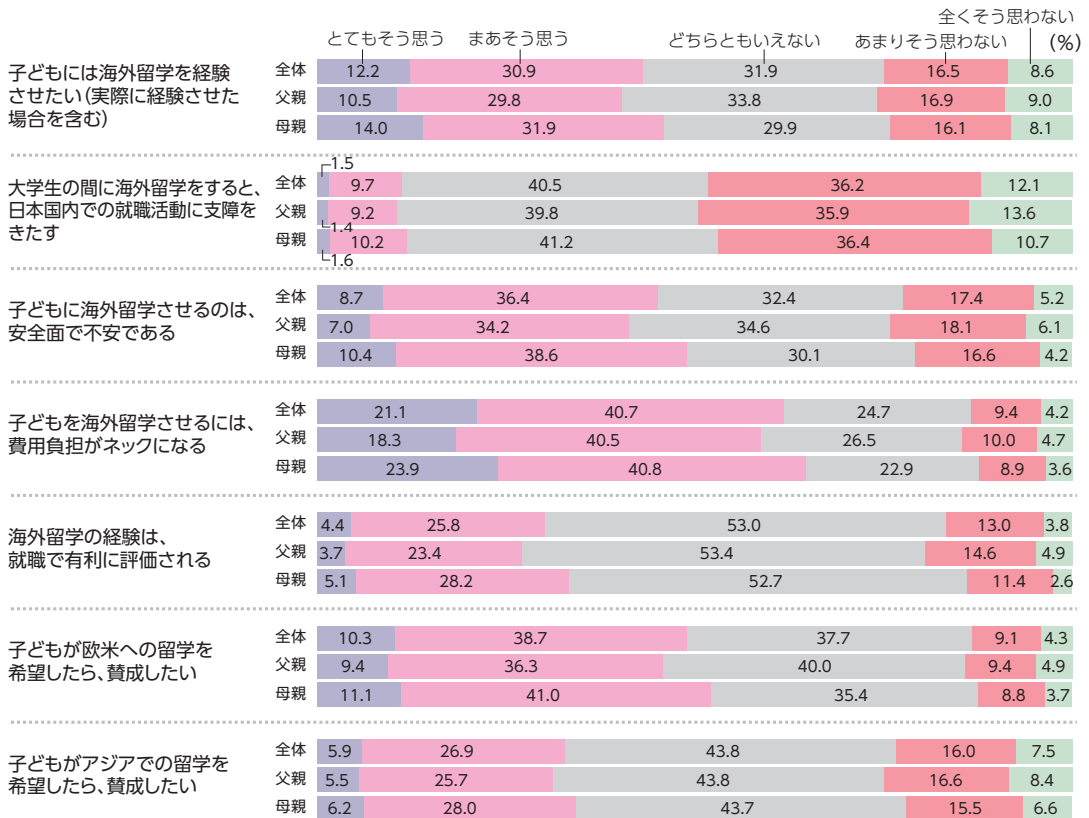
⑬ 海外留学に対する意識

子どもに海外留学をさせたいと考える親は4割。一方で、6割の保護者が費用負担をネックに感じている。

Q

海外留学についてのあなたご自身のお考えをうかがいます。次にあげる内容について、あてはまるものを1つずつお選びください。

図 13-1 海外留学に対する保護者の意識(全体・父母別)

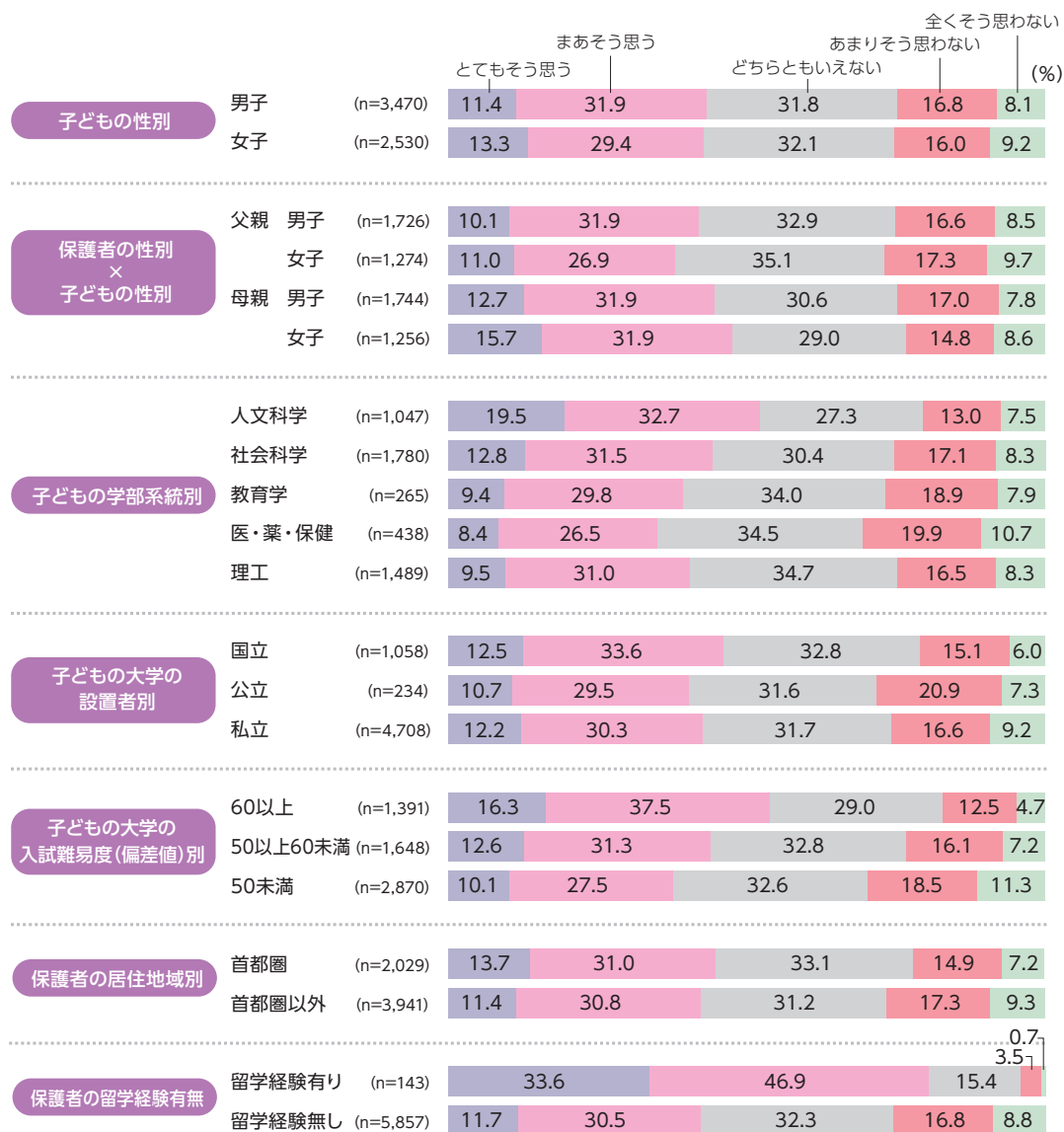


注) サンプル数は全体6,000名。うち父親3,000名、母親3,000名。

「子どもには海外留学を経験させたい(実際に経験させた場合を含む)」と考える保護者は43.1% (「とても+まあそう思う」の%、以下同)であった。一方で「費用負担がネックになる」との回答が61.8%にのぼり、「安全面で不安である」と45.1%が感じている。「日本国内での就職活動に支障をきたす」については1割程度とさほど高くはなく、むしろ否定的な意見(「あまり+全くそう思わない」の%)が48.3%と5割近くを占めている。また「海外留学の経験は就職で有利に評価される」と考えている保護者は30.2%で、これについては「どちらともいえない」が5割と多くなっている。行き先については、欧米は5割の保護者が肯定的だが、アジアについては3割である。父母別では、母親の方が留学をさせたいと考えている率がやや高い。

留学経験のある保護者の多くは、子どもにも海外留学を経験させたいと思っている。

図 13-2 「子どもには海外留学を経験させたい(実際に経験させた場合を含む)」の属性別回答分布



注1) 学部系統別の分析はサンプル数の多い5学部系統のみとし、その他は省略している。学部系統の詳細はp.3を参照。

注2) 入試難易度の詳細はp.3を参照。

注3) 「首都圏」は東京・神奈川・埼玉・千葉の1都3県としている。

保護者の属性別に、海外留学の意向「子どもには海外留学を経験させたい(実際に経験させた場合を含む)」をみると、留学経験のある保護者の8割が肯定的に回答している(「とても+まあ思う」の%、以下同)。学部系統別には、「人文科学」系統で52.2%、大学の入試難易度(偏差値)別には「60以上」で53.8%と高い。

調査企画・分析メンバー

●企画・分析担当

樋口 健 Benesse教育研究開発センター主任研究員
岡部 悟志 Benesse教育研究開発センター研究員
吉本 真代 Benesse教育研究開発センター研究員
宮本 幸子 ベネッセ次世代育成研究所研究員

※所属・役職名は刊行時のものです。

Benesse® 教育研究開発センターのWEBサイトのご案内

Benesse® 教育研究開発センターで実施している各種調査の結果は、すべて以下のWEBサイトでご覧いただけます。

<http://benesse.jp/berd/>

こちらのサイトは で検索できます。

「大学生の保護者に関する調査」

発行日:2012年9月10日 発行人:新井健一 編集人:原 茂

発行所:(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター

2YY001